



東ケープ州のマンデラが育ったクヌ村で、  
学校に通う子どもたち。

# 引き継がれる マンデラの挑戦

ソウェト。バラック小屋で暮らす人は今も多い。



ヨハネスブルグのサントンにあるショッピングモール。高級ホテルも並ぶ富裕層地区で、旧黒人居住区とは雲泥の差だ。



ケープタウン中央駅付近のビジネス街。オフィスビルが集まっている。



ソウェト(国内最大の旧黒人居住区)にも現在では富裕層が住み始め、立派な家が建ち並ぶエリアがある。



東ケープ州の主要都市ウムタタ。この街では、白人はまず見かけない。アパルトヘイト時代は、黒人ホームランド「トランスカイ」の首都だった。



父親の死後マンデラが一時期身を寄せていたムケズウェニ村。かつて黒人に割り当てられた土地の多くは荒地に近く、肥沃とは言えない。



高速鉄道のハウトレインのオリバー・タンボ駅(ヨハネスブルグ国際空港駅)。この路線はプレトリアやヨハネスブルグ、サントンをつ結んでいる。



ケープタウンの旧黒人居住区のケープ・フラッツ地区。近年アパートが建ち始めたが、バラック小屋や老朽化したホステルもいまだ健在で、部屋をシェアして家賃を切り詰める人が多い。



30年前の出来事は世紀のドラマだった。獄中でさえ信念を貫き、公正な社会の実現への闘志が揺るがなかったネルソン・マンデラが、南アフリカ・ケープタウン郊外のヴィクター・フェルスター刑務所（現ドラケンステイン刑務所）を出て解放された。1990年2月11日の晴天の日で、その姿は世界中に報道された。アパルトヘイト（人種隔離政策）の廃絶に立ち上がり、国家転覆の罪に問われて終身刑を宣告されたのが1964年で45歳のとき。投獄生活からようやく解放されたときは71歳になっていた。

うえ就労職種は限定されて、国内の移動は制限され、バスや電車も人種別で、黒人居住区は粗末だった。病院で白人用のベッドが空いていても黒人は使用できず、床に寝なければならなかった。1994年のANC政権誕生後、黒人の暮らしは変わり始めた。白人が独占していたビジネス界への進出が可能になり成功を収めた者や、有力企業への雇用を得た者など羽振りのよい層が増えてきている。しかし、いまだに課題は多い。旧黒人居住区のバラック小屋での暮らしや、低家賃の老朽化したホステルで薄給を懸命に切り詰める生活から抜け出せない人もいて、困窮の日常は続く。黒人の失業率は約30パーセントで、白人の4倍ともいわれ所得格差は埋まらない。

解放から30年、マンデラが幼少期を過ごし、そして埋葬されたクヌ村（東ケープ州ウムタタ近郊）にはネルソンと名づけられた学校が再建され、その近くには黒人が参政権を行使した94年以降に建設された地元の学校もある。黒人への義務教育導入はマンデラの悲願だった。教育の充実が国の発展に欠かせず、よりよい未来を築いてゆく土台となる。クヌで出会った子どもたちは底抜けに明るく、学んで遊んで学校生活を満喫していた。あの笑顔が曇ってしまう将来は避けたい。



左：首都プレトリアのユニオンビルディング（政府庁舎）。1994年にマンデラの大統領就任式が行われた。中：ケープタウンのロベン島に残るマンデラが投獄された独居。右：ヨハネスブルグのソウェトにあるマンデラのかつての住居。現在は記念館となっている。

なかにはこんな過激な意見もある――「俺たちに土地を返すなり、土地で潤っている白人に相応の負担を求めてもいいんじゃないか」。アパルトヘイトで黒人は土地を奪われ、現在でも人口の1割にも届かない白人が土地の7割超を所有している。この意見は少数派だが共感を呼ぶのも事実で、昨年の総選挙でラマポーザ大統領（ANC）は土地所有問題の是正に触れている。しかし、同じ問題で隣国ジンバブエは強硬に土地の接収に進んだため国内の混乱と欧米諸国の経済制裁を招き、国内経済に深刻な打撃を与える結果となった。

木下貴史（きのした たかし）

神奈川県横浜市在住。東海大学文学部卒業。アフリカ取材に力を入れ、1か月歩き回ったカメルーンをはじめ訪れた国は13か国。ネルソンマンデラの足跡をたどるため、南アフリカには7度訪れている。2018年12月には横浜市国際局のイベントで、マンデラの軌跡を紹介する写真展を開催して好評を博した。フェイスブック検索「木下貴史」。